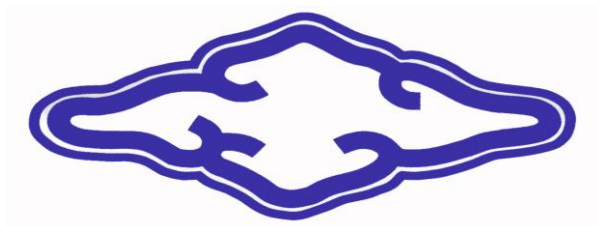


令和6年度
研究紀要



秋田県立横手高等学校
定時制課程

巻頭言

「学び続ける教師」を目指して

教 頭 齊藤 道太

令和6年度秋田県立横手高等学校定時制課程（青雲館）の研究紀要が無事に完成いたしました。日々の多忙な業務のなかで、貴重な原稿をお寄せくださいました職員の皆様、紀要のとりまとめを担当された研修部職員の方々に重ねて感謝申し上げます。

教員にとって研究と修養が重要な使命であることは言うまでもないことです。令和4年7月に教員免許更新制が廃止されたことにより、研修は単に免許を更新するための義務的、受動的なものではなく、自己成長や専門性を深めるための重要な機会として位置づけられるようになりました。同年12月の中央教育審議会答申において示された「新たな教師の学びの姿」では、全ての児童生徒の可能性を引き出す学びの実現に向けて、何よりも私たち教師の学びの姿を変えていくことの重要性が言及されています。教師には、児童生徒や社会の変化を前向きに受け止めるとともに、児童生徒のロールモデルとして、探究心を持ちつつ自律的に学ぶ姿勢が強く求められています。また、時代の変化に伴い、求められる知識・技能が常にアップデートされていくことを意識し、常に学びを継続していくことも必要です。現在全ての教師に求められていることは「研修観の転換」であり、自身の研修歴やキャリアに応じて、教師自らが主体的に研修をデザインしていくことです。

さて、本校では今年度、「一人ひとりの成長の支援と社会性の育成～深い理解と見守る温かい目、社会につなげる丁寧な指導」を重点目標に定め、多様な教育活動を展開してきました。定時制には現在さまざまな背景を持った生徒が通っています。学習のペースや興味、得意分野が異なるだけでなく、個々の生徒が抱える家庭環境や精神的な課題にも違いがあります。このような多様なニーズに対応するために、教員は柔軟な思考と幅広い教育手法を駆使する必要があります。生徒の多様性に対応する能力は、教員が教育現場で直面する課題を乗り越えるために不可欠なものです。本校では、生徒理解を深め、個々の生徒にあった指導方法を模索し、適切な支援を行うことを目指した研修をとくに重視しています。このような研修を重ねることで、教員個々の指導スキルを向上させるだけでなく学校全体の教育力を高め、変化が速く多様性が求められる時代に即応した効果的な教育活動を実践していきたいと考えています。「学び続ける教師」の理想を追い求め、今後も教職員一丸となって、研修に邁進していく覚悟です。

目 次

巻頭言

目次

1 令和6年度 校内研修計画・実施記録	1 頁
2 授業研修	
令和6年度研究授業の実施について	2頁
論理国語(国語)学習指導案	3-4頁
国語科分科会記録	5頁
地学基礎(理科)学習指導案	6-7頁
理科分科会記録	8-9頁
研究協議会全体会記録	10-15頁
3 教育実践・職員研修紹介	
A-29 高等学校新任教頭研修講座に参加して	16-17頁
A-34 高等学校新任学年主任研修講座に参加して	18-19頁
A-40 高等学校新任道徳推進教師研修講座に参加して	20頁
A-42 通級指導教室新担当者研修に参加して	21頁
4 校内研修	
令和6年度特別支援教育に係る研修実施計画	22頁
FigJam 職員研修会相互授業参観	23頁
相互授業参観	24-25頁
5 校外研究発表紹介	
令和6年度秋田県高等学校定時制通信制教育研究大会 「単位制と学年制を併用する本校の教育課程～その特徴と課題～」	
発表内容	26-27頁
発表資料	28-34頁
6 編集後記	35頁

令和6年度校内研修計画

研修部

1 目標

校内外における研修の充実を図り、生徒理解の促進と指導力の向上に努める。

(1)校内研究主題

- ア 多様な生徒の実態に対応した学習指導のあり方について
- イ 成績処理における ICT の効果的な活用について

(2)校内研修年間計画

多様な生徒の個性と能力に応える授業の工夫、生徒理解のための研修会、相互授業参観、授業研修等の充実を図り指導力の向上を目指す。

2 職員研修計画

第1回	特別支援教育に係る研修	職員研修会(特別支援教育) 特別支援教育委員会と連携 ① ケース相談 6月28日(金) ② 研修会「インクルーシブ教育システムの構築」7月29日(月)
第2回	ICT関連の研修	職員研修会(情報) 教務部、教育情報委員会と連携 ① デジタル採点システム「百問繚乱」操作研修 8月7日(水) ② FigJam 職員研修会 12月23日(月)

3 授業研修

相互授業参観	第1回	前期 6月26日(水)～ 7月10日(水)
	第2回	後期 10月22日(火)～11月 5日(火)
研究授業		研究授業(国語・理科)および協議会(分科会) 10月23日(水)

4 研究紀要

「校内研修計画・校内実践記録」、「研究授業」、「教育実践・職員研修紹介」の内容で作成予定です。その中の「教育実践・職員研修紹介」のページで本年度の「A・C講座、公開講演」を掲載したいと考えております。つきましては受講された方は原稿作成講座実施後、その講座の内容をまとめたものや資料等をいただければと思います。

研究紀要の最終原稿締め切りを2月7日(金)と考えております。御協力よろしく申し上げます。

令和6年度 研究授業の実施について

研修部・教務部

- 1 目的 教科の枠を越えた授業参観や研究協議会により、指導法の工夫や改善に役立て、授業力向上を図る。
- 校内研究主題：深い学び実現する、対話等の言語活動の推進
<手立て>
- (1) 対話を通じて達成すべき学習目標を理解させる。
 - (2) 「問いかけ」や「やりとり」を通じて興味・関心を引き出すとともに、生徒の思考を深めさせる。
 - (3) Google ClassroomやJamboard、FigJamなどを用いることで、発表を苦手とする生徒にも対話の機会を広げる。

- 2 日時・日程 令和6年10月23日(水) 特別C日課

1校時 13:10～13:55(45)授業参観

SHR 13:55～14:00(I部終わり)

※ 研究授業以外のI部生徒は1校時で放課

2校時 14:15～15:00(45)

研究授業 【国語科】 担当者:本 多 菜美子 先生
3年次B組 論理国語:3B教室

【理科】 担当者:石 川 忍 先生
3年次A組 地学基礎:3A教室

研究協議会(分科会) 会議室:国語科 図書・視聴覚室:理科

15:10～15:55(45)

(1)授業者より反省

(2)グループ協議

(+)良かった点(水色の付箋)

(-)改善が必要な点(桃色の付箋)

参観者からの提案(黄色の付箋)

(3)指導助言

研究協議会(全体会) 会議室

16:05～16:50(45)

・授業者より ・協議 ・指導助言

国語科 論理国語 学習指導案

日 時:令和6年10月23日
 対象クラス:3年B組 18名
 場 所:3年B組教室
 指 導 者:本多菜美子
 使用教科書:「新編論理国語」
 (大修館書店)

1. 単元名 対比に着目しながら読解したり、対比を用いて説明したりする。
2. 単元の目標
 - ・文章の種類に基づく効果的な段落の構造や論の形式など、文章の構成や展開の仕方について理解を深めることができる。〔知識及び技能〕(1)エ
 - ・個々の文の表現の仕方や段落の構造を吟味するなど、文章全体の論理の明晰さを確かめ、自分の主張が的確に伝わる文章になるよう工夫することができる。〔思考力、判断力、表現力等〕書くこと・オ
 - ・言葉がもつ価値への認識を深めるとともに、生涯にわたって読書に親しみ自己を向上させ、我が国の言語文化の担い手としての自覚をもち、言葉を通して他者や社会に関わろうとする。〔学びに向かう力、人間性等〕
3. 単元と生徒 男子14名、女子4名、合計18名のクラスである。発問の際、指名をすると答えるが、全体に問いかけると反応が返ってこないことが多い。受け身の姿勢が強く、ペアワークも苦手である。対比の使い方を FigJam 等を使った対話を通して学ばせることで、生徒の積極性を引き出したい。対比とは、伝えたいことを分かりやすく伝えるための一つの手段であることに気づき、話す際、書く際に活用できる力を身に付けさせることができる単元であると考えている。

4. 単元の評価規準

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
文章の種類に基づく効果的な段落の構造や論の形式など、文章の構成や展開の仕方について理解を深めている。	個々の文の表現の仕方や段落の構造を吟味するなど、文章全体の論理の明晰さを確かめ、自分の主張が的確に伝わる文章になるよう工夫している。	言葉がもつ価値への認識を深めるとともに、生涯にわたって読書に親しみ自己を向上させ、我が国の言語文化の担い手としての自覚をもち、言葉を通して他者や社会に関わろうとしている。

5. 単元の指導計画と評価計画

時	評価規準			学習活動
	知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度	
1			本文に興味を持ち、対比の関係をとらえようとしている。	全体を音読する。対比になっているものを発表する。
2	本文における対比の関係をとらえている。			対比を示す語句、接続表現等を理解する。
3		地図とデジタル地図の特徴を読み取る。		地図とデジタル地図の対比を意識しながら特徴を押さえる。
4			対比の関係について理解を深めて自らの表現に生かそうとしている。	対比を用いて説明をする。
5		対比を示す語句を効果的に使用する方法を考え、吟味した上で用いている。	対比を用いて自分の考えを表現しようとしている。	対比で主張を支える演習をする。

時	評価計画(評価方法)	学 習 活 動
1	主体的に学習に取り組む態度 (姿勢の観察・発表)	全体を音読する。対比になっているものを発表する。
2	知識・技能(発表・記述の確認)	対比を示す語句、接続表現等を理解する。
3	思考・判断・表現 (発表・記述の確認)	地図とデジタル地図の対比を意識しながら特徴を押さえる。
4	主体的に学習に取り組む態度 (姿勢の観察・記述の確認)	対比を用いて説明をする。
5	思考・判断・表現(記述の確認) 主体的に学習に取り組む態度 (姿勢の観察・記述の確認)	対比で主張を支える演習をする。

6. 本時の計画(5/5時間)

(1)本時の目標 主張を支えるための対比の使い方を理解し、表現に生かす。

(2)展開

段 階	学 習 活 動	指導上の留意点	評 価
導 入	・前時の確認をする。	・説明における対比の効果を、ワークシートとやりとりを通じて確認する。	
展 開	・本時の目標を確認する。		
	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; text-align: center; margin-bottom: 10px;"> 主張を支えるための対比の使い方を理解し、表現に生かそう。 </div> ・主張に対する根拠を考える。 ・対比を使って150字程度でまとめる。 ・発表し、全体で共有する。	・学習ノートや FigJam を用いて、エレベーターやエスカレーターの特徴をまとめさせる。また、書店やインターネット、図書館の特徴をまとめさせる。 ・FigJam を全員が見られるように電子黒板に提示する。 ・ワークシートに他の人の意見で参考になったものを書かせる。 ・FigJam に出された特徴をもとに GoogleClassroom にまとめさせる。 ・全員を GoogleClassroom に注目させる。 ・何人かに発表させる。	<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-bottom: 10px;"> 対比を用いて表現に生かすことができる。(思考・判断・表現) </div> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px;"> 対比を用いて自分の考えを表現しようとしている。(主体的に学習に取り組む態度) </div>
まとめ	・本時を振り返る。 ・ワークシートを提出する。	・ワークシートに感想を書かせる。	

分科会記録

期 日	令和6年10月23日(水) 15:10~15:55		
授業者	本多 菜美子	司 会	小西 宗子
場 所	図書・視聴覚室		
参加者	物部 長幸 指導主事、柴田 俊英、萩原 亨、藤谷 淳一、 今入 健志郎、齊藤 超、水澤 優香		
<p>(1)授業者より</p> <ul style="list-style-type: none"> ・FigJamに書き込まれた意見を見ることで、新しい気づきを得た。 ・生徒の出席率も高く、真面目に取り組んでくれた。 ・指導案通りに進めようとするあまり、作業中の生徒がいても先に進んでしまった。 <p>(2)グループ協議</p> <p style="margin-left: 20px;">①学習課題について</p> <ul style="list-style-type: none"> ・まとめの方向性を定めた方がよかった。 ・生徒の意見をFigJamで表示する際、もっと工夫があってもよかった。 ・新たな取り組みがよかった。 ・生徒の意見を板書でまとめてもよかった。 ・板書が明確であった。 ・「対比を使う」がテーマなので、生徒同士の意見を「対比」した方が良かった。 ・「対比」というテーマからずれた生徒への対応が必要だと感じられた。 <p style="margin-left: 20px;">②生徒の学習活動について</p> <ul style="list-style-type: none"> ・時間を区切ったのが良かった。タイマーを使って視覚的に表示してもよかった。 ・FigJamによる活動の可視化により活発化した。 ・生徒の発言を促しやすかった。 ・考える時間が十分あった。 ・発言が苦手な生徒も取り組んでいた。 ・FigJamで書かせた後に、指名し発表させたことの必要性について疑問がある。 ・FigJamを用いて対話が活性化された。また対話した生徒以外の他の生徒の意見が分かった。 ・スムーズに学習課題に取り組んでいた。 ・生徒がよく発言していた。 ・「本を読める量、読める時間」について、「買わないと読めない」という意見が多かったため、さらに踏み込んだ発問をしても良かった。 <p>(3)物部指導主事から</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「書くこと」の授業としては基準より多くの文章を書く生徒がいた点で達成できたと言える。対比を用いて書く主眼としては達成できていた。 ・ねらいは評価のポイントを考えること重要である。 ・ICTの活用については生徒に選択させるなど、生徒の実態に合った活用が必要である。 ・評価については「知識・技能」を単元の1～2時間目、3～4時間目に「思考・判断・表現」、「主体的に学習に取り組む態度」は4～5時間目にする適切である。 ・生徒がどのような発言をすれば「深い学びが実現できた」かを想定するとよい。 			

「地学基礎」 学習指導案

日 時 令和 6 年 10 月 23 日(水)2 校時

場 所 3A 教室

教科書 高等学校地学基礎(第一学習社)

授業者 石川 忍

1. 単元名

第 3 章 大気と海洋 第 2 節 大気と海水の運動 1 エネルギー収支の緯度分布

2. 単元の指導目標

地球が受け取る太陽放射エネルギーと、地球放射エネルギーは、緯度別に見た場合、釣り合っていないことを理解させる。また、地球が受け取る太陽放射エネルギーの緯度差によって、大気や海洋が熱を南北に輸送していることを理解させる。

3. 単元の評価規準

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
緯度ごとのエネルギー収支、地球における南北の熱の輸送を理解し、知識を身に付けている。	緯度ごとのエネルギー収支を示すグラフを作成し、グラフから地球の南北の熱の輸送について考察することができる。	緯度ごとのエネルギー収支に関心をもち、大気の大循環について意欲的に学習しようとしている。

4. 単元の指導計画

地球が受け取る太陽放射エネルギー(1 時間、本時) 南北の熱の輸送(1 時間)

5. 単元と生徒 普通科 3 年 A 組 18 名

興味・関心を素直に表し、興味があることに対して積極的に取り組む生徒が多い。その一方で、本人の特性から学習に困難を抱えていると思われる生徒も多く、物事の理解に時間がかかったり、数量関係を上手く把握できなかったり、文章表現を苦手としたりする生徒も見られる。

今回はエネルギー量の数値を直接比較させるのではなく、グラフにより視覚化することで理解を促したい。また、併せてグラフ化する上で見いだしたことを表現させ、文章表現への苦手意識を減少させつつ理解を深めさせたい。

6. 本時の計画

(1) 本時の目標

緯度ごとのエネルギー収支についてグラフを作成し、エネルギー収支について考察して、自分の考えを表現することができる。

(2) 本時の展開

	主な学習内容	指導上の留意点	評価の観点
導入 5分	<ul style="list-style-type: none"> 地球全体のエネルギー収支の平衡が保たれていることを復習する。 		
課題:地球のエネルギー収支は、緯度ごとに見るとどのような特徴があるだろうか。			
展開 30分	<ul style="list-style-type: none"> 図 20 から、緯度により単位面積あたりの太陽放射エネルギーが緯度ごとに異なることを学ぶ。 実習(p86)に取り組み、緯度ごとのエネルギー収支のグラフを描く。 描いたグラフや図 22 から、緯度ごとに見たときのエネルギー収支を読み取り、緯度ごとに熱平衡が保たれていない理由を考察する。 	<ul style="list-style-type: none"> 動画等を用いて大小関係をイメージしやすくする。 簡単な質問を通して作業の前に見通しを持たせる。 2本の曲線は、色を変えて描かせるなどして見分けやすくさせる。 FigJamに自分の考えを記入させたり、それを元に対話を促したりする。 	<ul style="list-style-type: none"> 与えられた数値からグラフを描くことができる。(知) 学習した知識を用いて自分の考えを表現することができる。(思)
まとめ 10分	<ul style="list-style-type: none"> 緯度ごとのエネルギー収支の特徴をまとめる。 練習問題に取り組み、学習内容を振り返る。 	<ul style="list-style-type: none"> Google フォームを用いて自分のペースで練習問題に取り組めるようにする。 余裕があれば熱平衡が保たれていない場合、地球はどのような環境となるかを想像させ、次時の予告を行う。 	

(知) 知識・技能 (思) 思考・判断・表現 (主) 主体的に学習に取り組む態度

分科会記録

期 日	令和6年10月23日(水) 15:10~15:55		
授業者	石川忍	司 会	福田勇幸
場 所	図書・視聴覚室		
参加者	佐藤栄幸教育専門監 今野栄一 高橋勝彦 鈴木健夫 後藤一 熊林孝 佐々木司(記録) 福田勇幸(司会) 石川忍(授業者)		
<p>(1)授業者より</p> <ul style="list-style-type: none"> ・板書を忘れ、目標を書くタイミングが遅くなってしまった。 ・FigJamで意見を書くときに、生徒は付箋に名前が残るのを気にして書きにくそうにしていた。 ・中盤写真も貼って盛り上がった。 ・考察2は難しいながら、ある程度目標は達成できた。 ・時間配分が難しかった。 <p>(2)グループ協議</p> <p>鈴木 +:①図が移動するのがイメージしやすい。 ②プリントでは取り組めない生徒が入力で取り組んでいた。 ③周りの意見を参考に、自分の意見をかけている生徒がいてよかった。 -:①声かけの工夫。 ②指名してもよかった。</p> <p>改善点:①小さい文字は拡大して表示した方がよかった。</p> <p>後藤 +:①テンポのいい授業だった。 ②生徒と教師ともにICT活用ができていた。 -:①表の値の根拠を示した方がいい。 ②数学の三角比との関連を示した方がいい(教科横断)。 ③生徒の返答を粘り強く待つ。</p> <p>今野 +:①生徒のICT活用ができています。日ごろからの成果。 -:②三角比の値を「数学の先生に聞いてください」と言ったところがもったいない。 ③GoogleChromebookの活動に参加しない生徒の援助が必要である。</p> <p>改善点:①まとめのパワーポイントは生徒のGoogleclassroomで配布してもいい。</p> <p>勝彦 +:①グラフなどFigJamを使って分かりやすい。 ②たくさんの内容をFigJamを使うことで、短時間でできた。 -:①プリントの最初の導入を大事に。 ②もっと丁寧な解説があつてよい。</p> <p>熊林 +:①FigJamでたくさんのができていた。 -:①FigJamで文字が小さく見えにくいところがあった。</p> <p>改善点:①スライドの解答部分の色を変える。</p> <p>福田 +:①生徒の間違いをフォローしながら進めていた。 ②生徒に合った題材の選び方だった。 ③FigJamの活用。 ④GoogleChromebookがうまく活用できていた。 -:①指示はダメ押しして徹底する。 ②コサインと面積の説明があると良い。 ③意見を書くことができている、FigJamに書かない生徒がいた。</p>			

(3)指導助言 佐藤栄幸 教育専門監

- ・生徒は緊張しながらも良く取り組んでいた。
- ・生徒から引き出す場面があって良かった。
- ・教科書に答えが書いてあるが、省略せずに生徒にグラフを描かせていた。
- ・教師の説明が少なく、生徒は話し合い等しながら答えを出していた。
- ・FigJam、話し合いなどいろいろな活動を用意し、生徒のいい面を評価する。
- ・FigJamは結果のみしか残らないので、プリントなどで過程を残す必要がある。
- ・評価の手立てを指導に示す。
- ・指導案の後半の内容を、焦点化し具体化し生徒に示す。
- ・指導案とプリントで内容が違う。目標とまとめの整合性を取る必要がある。
- ・新学習指導要領の観点では「知識・理解→思考・判断・表現→主体的に学習に取り組む態度」の流れであるが、理科は実験を起点にして、「実験が面白い(主体的に学習に取り組む態度)→知識・理解→思考・判断・表現」のサイクルがある。バランスよく評価(CCAが必ずしも不適ではないが)することが必要である。

研究協議会全体記録

司 会	齊藤教頭	記 録	齊藤超
<p>次第</p> <p>(1) 分科会グループ協議報告</p> <p>(2) 指導助言 指導主事 物部 長幸 先生 教育専門監 佐藤 栄幸 先生</p> <p>(3) 謝辞 校 長 佐藤 真之</p>			
<p>令和6年度 教育委員会等指導主事訪問(2回目)全体会記録</p> <p>[教頭] ただいまから全体会を行います。 はじめに校長より本日訪問されました指導主事、教育専門監の先生方の紹介があります。</p> <p>[校長] 指導主事、教育専門監の紹介です。</p> <p>[教頭] それでは、各研究協議会より報告をお願いします。はじめに国語科からお願いします。各研究協議会より報告をお願いします。</p> <p>[国語] 今日の本多先生の授業は、書くことの授業でした。 ねらいとしては、深い学びを実現する、対話等の言語活動の推進でした。 書くことが苦手な本校の生徒たちに、どのように書くことに取り組みさせるのかということから、FigJam を利用して書くことへのチャレンジという内容で授業が進められていました。FigJam を利用すること自体がチャレンジであり、話すことが苦手な生徒でも、FigJam を用いることで自分の意見を表現すること、その意見をまとめること、他の生徒の意見を取り入れることができ、最後に 150 字でまとめるところまでつなぐことができた授業でした。 そして、指導主事物部先生からは本時のねらい、ICT の活用、そしてについて評価についてご指導・助言をいただきました。 最初、ICT については、今回は FigJam を利用しておりましたので、話すことはできなくても、書くことはいっぱいある、という本校の生徒の実態に合った活用であったということ、ICT機器を用いて入力する生徒、手書きで書く生徒など、今後は個別最適化された方向に進んでいくことなどからみても、良い取り組みではなかったかというご助言がありました。 評価の方ですが、評価とねらいというのが密接に結びついているので、評価す</p>			

る際の振り返りにどのような記述があるのかというのをあらかじめ想定しておいて、これぐらいの記述があったら本時の目標が達成できたというふうに評価できるというのをこの後の評価とねらいのところに生かしていきたいということでした。また、最初に想定しておいた言葉が教師のまとめから出るのではなくて、生徒の言葉の中で出てきたらその時間の授業としては良かったのではないのかということでした。その生徒の言葉を引き出すために発表した後に一声かけたり励ましたりというのを繰り返し続けていくことによって、生徒の深い学びが実現されるのではないかと、またその深い学びというのは本校でどのように定義しておくのかということも、今後共通理解を図るとよいのではないかとのご助言がありました。以上が国語科からの報告です。

[教頭]

ありがとうございました。続いて理科研究協議会から報告をお願いします。

[理科]理科は石川先生が3年次の地学基礎の授業を行いました。単元は、「大気と海洋」ということで、その中の地球が受けるエネルギー収支の緯度による分布の違いについて、その違いをグラフ化したものを生徒が読み取り、その違いがどこから生まれてくるのかということ、生徒が考察し、発表するという内容でした。

感想として、ICTをうまく活用して、FigJamを使って普段発言ができない生徒でも書けるような形になっている形式がいいという評価があった一方、授業者本人からは、発表の時に下の方に名前がついていることを気にして書き込むことができなかつた生徒もいたのではないかと反省もありました。また、研究協議会に出された点として、生徒への指示が通らない場面が時折見られたので注意してほしいということ、授業の中で、光の量が増えるのはなぜなのか三角関数を用いて説明したほうが良かったのではないかと意見がありました。

終わりに、教育専門監の佐藤栄幸先生からご指導・助言をいただきました。生徒の様子を引き出すとかグラフの読み取りなど行うとき、生徒に話をさせて教師が声かけをしすぎないことが良かったのではないかと、発表するとき、FigJamだけではなくて他の表現方法もあるのではないかと、いろいろなものの組み合わせを使って発表に結びつけた方がいいのではないかとご助言がありました。本時に関してはFigJamとプリントをうまく使ってやっているという評価をいただきました。また、評価の手立てとして、評価の基準を前もって設定しておいて、何ができるかということを具体的な視点で示しておいて、目標を具体化すると、生徒がさらに分かりやすくなり、我々の方も評価を行うのが容易になるのではないかとご助言をいただきました。

さらに、今の理科では生徒が見出すということがキーワードになっており、3観点である知識理解、それから思考判断、主体的な学習の態度という流れよりも、今日の理科では実験があり、そこから思考があって、それから知識という形になっていくという流れになっており、今日の授業もその流れに沿っているという評価をいただきました。

以上が理科からの報告です。



指導助言

[教頭]ありがとうございました。

それでは、物部先生よりご指導助言をいただきます。

[物部指導主事]

高い席から失礼いたします。改めまして、高校教育課指導チームにおります物部と申します。本日学校訪問に際しまして、準備の段階から佐藤校長先生、齊藤教頭先生、それから関係の先生方にはきめ細かなご配慮、ご対応いただきまして感謝申し上げます。本当にありがとうございました。

5月の末に一度お伺いしておりますが、今回、生徒の皆さんがその時よりも明るくなっているという印象がありました。先生方は毎日接しておられるのでお気づきでないかもしれませんが、授業中の発言など多かったと思いますし、表情も何かしら柔らかくなったな、という印象を受けました。こういったことも、先生方の日頃のご指導、あるいは信頼関係を構築していただきながら教育活動を進めていただいている賜物であると感じたところでございます。

私からは、表簿閲覧、それから、特別支援教育、授業の感想と授業改善の重点事項の3点についてお伝えしたいと思います。

1つ目の表簿閲覧についてです。昨年度から出席簿、生徒指導要録は校務支援システムにより閲覧しております。昨年度からのデータ移行、あるいはシステムの運用に際しましては、教務部の先生方をはじめ、関係の先生方に大変なご尽力をいただきましておかげさまで、現在では第二庁舎から、全部の学校の指導要録を拝見できるというような形になっております。それがいいのか悪いのかは評価が難しいところではありますが、時代としてそういう流れになっております。今後も様々な場面で改善、修正等をお願いすることもあるかと思いますが、どうぞ、引き続きよろしくお願いたします。

表簿全般につきましては、学校全体として統一された形で整備されておまして、丁寧な記載も多くあったなと感じております。先生方が日頃から生徒の皆さんをよく観察して、記載いただいているという事項が多くございました。

細かなことについては、教務主任の萩原先生の方にお伝えしておりますが、これからは学校全体として統一した形でご記載いただければと思っております。表簿に関しては以上です。

2点目の特別支援教育についてです。本校には藤谷先生もいらっしやいまして、スペースイオの取り組み、あるいは通級指導教室の取り組みもされており、全国的にも特別支援教育の取り組みが進んでいる学校であると思います。もうすでに先生方がご存じのことも多いかとは存じますが、お伝えをさせていただきます。

昨年度の令和5年度から、第4次秋田県特別支援教育総合整備計画がスタートしております。今後5年間の秋田県の特別支援教育の方向性を示すものとなっておりますので、ぜひご覧いただければと思います。この中では、一人ひとりの教育的ニーズに応じた指導支援の充実が謳われております。高校においても、取り組んでいくべき教育課題の一つとなっております。また、4月に特別な支援を必要とする生徒の数ということで調査をしておりますが、年々増加傾向にあります。そういった状況の中で、秋田県では、教職キャリア指標の全てのステージにおいて特別支援教育の観点の設定されるようになりました。これまでは一部の先生方、専門的な知識をお持ちの先生方に偏ることが多かった特別支援教育の視点ですが、これからは全ての先生方にその資質能力が求められるということで、これも時代の流れだなと感じております。

各校におかれましては管理職の先生方のリーダーシップのもと学校全体で取り組んでいただきたい事項の一つとなっておりますので、引き続きよろしく願いいたします。特別支援教育の先生方とお話をしておりますと切れ目ない支援の充実というお話がよく出てまいります。例えば縦のつながりとしては、中学校から高校への引き継ぎ情報の提供、これはかなりなされているということで、校長先生からも伺っております。それから、高校から就労先あるいは高校から進学先も含めた縦の情報共有、それから横の情報共有といたしましては先生方同士の情報共有、あるいは保護者との連携、または外部機関としては例えば特別支援チームの活用といったところも含めまして、この縦と横の情報共有を強化していくことによって一人ひとりの生徒を支援していくということが大事であるとされております。いずれにいたしましても、私たち教員一人一人が特別支援教育の視点をもつことによりまして生徒一人ひとりの学校生活の充実につながっていくということになるかと思っておりますので、引き続き先進的な取り組みを充実させていただければと考えております。以上が特別支援教育になります。

3点目は、授業全般についてということになります。今回、深い学びを実現する、対話等の言語活動の推進ということテーマにこの半年取り組んでいただいております。今日の研究授業でも、そのことが協議のテーマとして話題となりました。私、拝見していて春よりも話すようになったなという印象もございましたし、やはり生徒だけではなくて人は話したいのだなということ、いろいろな事情があって話せないことは多いんだと思うのですけれども、話したいものは心の中にたくさんあって、それを話す場が設定されればどんどん話していくのだなということを感じたところです。

先生方がいかがでしょうか、普段接しておられる生徒の皆さんを想像してみて、ぜひそういったところを引き出していただければと思っております。今回の言語活動の推進というテーマは非常に良かったなと思っております。今回で終わることなく、ぜひ繰り返し、このような場を設定していただいく、あるいは形を変えて設定していただいく、といったことを継続することで、生徒の皆さん

が人前で話したりできるようになってくるのではないかと考えているところです。

今回は具体的な取り組みといたしまして3点ございました。

1つ目は、学習目標の理解ということについてです。授業のゴールを生徒と共有しながら進めるということは非常に大切な視点かと考えております。本日の授業でも、ほとんどの授業で目標やねらいを記載していただいております。授業によっては本時の流れまでユニバーサルデザインの視点を取り入れた流れの提示といったことも多くの授業でなされておりました。本時の目標については、できるだけ焦点を絞ったほうが学習評価もしやすいのではないかなと思っておりますので、参考にさせていただければと思います。

例えば、今日の体育の授業ではバトミントンの授業、バトミントンが上達するための有効な手立てというのが焦点化された目標として提示され、各自で有効な手立てを設定するという授業がされておりました。そして、振り返りのところでは、今回の手立てが有効だったかどうかを振り返っていました。ですので、生徒は、授業の前にどういうふうにやってみようかなということを考えて実践をしてみて、振り返りのときにこの手立てが有効であれば続けるし、有効でなければやめるといったようなことを考えるだろうかと推察いたします。このように授業の狙いが焦点化されていますと学習活動ですとか振り返りまで一歩筋を通った構成になっていくのかな、と考えておりますので、ぜひ今後も学習目標についてはご留意いただければと考えております。

2つ目は興味関心を引き出す工夫ということについて、例えば今日理科の授業であったかと思うのですが私ちょっと勉強不足であったのですが、ある現象を小麦粉や砂糖、それから片栗粉等を使って実験をして検証するというような内容であったかと思えます。驚くほど生徒の目が生き生きしていたなと思えました。やはり、学習課題の設定によって生徒の学習意欲を引き出すことができるのだかと改めて感じたところでございます。こういったことの繰り返しが、学習意欲の喚起といったところにもつながってくると思ったところです。

3つ目のICTの活用につきましては、先ほど協議会の報告者からもお話がありました。ICTの機器の効果的な活用はもちろんなのですが、生徒の実態に合わせた活用といったことを考えていただくことによって授業自体も良くなりますし、生徒の皆さんの成長にもつながるのではないかと考えておりますので、引き続き本校の実態に合った形を試していただいて、そしていいものをどんどん共有していただければ、と考えています。授業につきましては、以上となりますが、生徒の皆さん生き生きと頑張っている様子を拝見することができまして、本当に私自身も勉強になったところでございます。ありがとうございました。

最後になりますが、10月9日に県の定時制通信制生活体験発表大会がありました。本校からは2名の参加があり、自身の苦労したことなどを踏まえて、今後の希望を自分の言葉で語っていたことが大変印象的でした。この発表大会は、実は今回で72回目だそうで、1950年代、戦後間もない頃からこの大会があるようです。その当時の発表タイトルを見ても、働く喜び、職場と私といったようなタイトルなのですが、これらを見ましても数十年前の当時、定時制通信制課程の高校が求められていた役割と現在における役割はだいぶ変わってきている

と感じました。横手高校定時制の生徒さんにおかれましては、義務教育段階から様々な事情を抱えている方、あるいは学習支援などを必要としている方もいると伺っております。そういう中で、先生方のご尽力のおかげで、この3年間の中で、あるいは4年間の中で大きく成長している生徒さんがたくさんいるということも伺っております。まもなく社会に出る生徒さんも多いのではないかなと思います。その社会に出る前のトレーニングができるのはあとわずかなのだろうと感じたのも事実でございます。先生方におかれましては大変ご多忙のおりとは存じますが、日々の授業、あるいは特別活動、部活動等を通じて、ぜひ生徒の皆さんを温かく育てていただきまして、生徒の皆さんがこの社会の中で存分に力を伸ばして豊かな生活を育んでいけるようご尽力いただければ、と考えております。本日は長時間にわたりまして本当にどうもありがとうございました。



A-29 高等学校新任教頭研修講座に参加して

教頭 齊藤 道太

研修の目標

各学校が直面する喫緊の課題に対して組織的に対応するために、総合的な学校経営力を身に付けることで教頭としての資質向上を図る。

期日・場所

I期:令和6年5月20日(月) 本校(オンライン実施)

II期:令和6年6月24日(月) 秋田県総合教育センター

内容・感想

I期:

〈講義・演習〉「学校の危機管理」

秋田県教育庁高校教育課 主任管理主事 柴田 果織 氏

学校の危機管理と職員の不祥事防止に向けての講義とともに、具体的な場面を設定して初期対応について考察・協議する演習が行われた。教頭は常に高いアンテナを張り、職員や生徒の些細な変化にも気付くことができるように努めなければならない。そのためには、日頃からの声掛けやコミュニケーションを重視し、風通しの良い職場環境の構築が必要だと感じている。また、長年現場で行われてきた「慣例」であっても、違和感を覚えたならばすぐに声を上げるなどの対応をしていきたい。全職員の模範となるべく、高い理想と倫理観をもって日々の教育活動に励む覚悟である。

〈講義〉「目標管理と人事評価システム」

秋田県教育庁総務課 副主幹 吉田 英亮 氏

適切な人事評価や日々の面談、研修受講の奨励などを通して、5～10年後の管理職やミドルリーダーを育成していくとともに、経験豊富なベテラン教員のやる気を引き出し、学校活性化に活かしていくことを目指していかなければならない。目標管理・人事評価システムは教職員の資質向上と学校の活性化のための手段であって、形骸化・形式化しないように改めて注意していきたい。

〈講義・演習〉「インクルーシブ教育の充実に向けてー管理職が果たすべき役割ー」

秋田県総合教育センター 主任指導主事 島津 憲司 氏

特別支援教育の視点は、全ての校種において不可欠であることを再認識した。また、教頭は担任や学年任せにすることなく、校内委員会や職員会議等で教職員の役割を明確にしながら、チームによる支援体制を明確にしていかなければならない。そのために、特別支援教育コーディネーターと連携したり、外部機関と連絡調整を図ったりするなど、特別支援の体制が機能していくためには教頭のコーディネーターがきわめて大切だということを理解できた。

〈講義〉「教員のメンタルヘルス」

東北中央病院 主任臨床心理士 古澤 あや 氏

精神疾患による病気休職している教職員数が全国で 6500 人を超えている状況が大変深刻に捉えている。メンタルヘルスケアは教頭の重要な役割の一つであり、そのために日頃から教職員の些細な言動、変化についても留意していかなければならない。教職員の心の健康を維持していくことは、学校におけるリスクマネジメントにも直結することなので、極めて重要だと感じている。一方で、重責を担う管理職自身のメンタルヘルス対策はどちらかと言えばなおざりになっていないかとの思いもある。そのような研修が今後もっと必要ではないだろうか。

Ⅱ期:

〈講義・演習〉「学校組織マネジメント」

秋田大学大学院 教育学研究科 特別教授 近江谷 正幸 氏

教頭の担うべき業務の領域があまりにも多岐にわたるため、教頭を直接支えるキーパーソン、ミドルリーダーの存在が円滑な組織運営には必要だといえる。教頭として、キーパーソンになりうる人材を見つけ、育成・活用することを心掛けていきたい。また、学校組織マネジメントにおいては、「変える」、「見つける」、「つなぐ」の3つの視点が重要である。学校教育目標の実現のためには、管理職だけでなく教職員一人一人が「変える」ことの必要性を理解し、学校を「変える」主体としての役割を果たすことが必要である。演習でも実施したSWOT分析などを通じて、学校の「強み」や「弱み」の中から有効な資源や手立てを「見つける」ことも重要であり、加えて、学校が組織として最大限力を発揮できるようにするためには、「教職員と教職員を」「教職員と保護者を」「教職員と地域を」つなぐことが不可欠であると感じた。

〈協議〉「学校経営に関する課題とその解決策①・②」

秋田県総合教育センター 主任指導主事 鈴木 紀子 氏 他

各校の新任教頭と互いに業務上の悩みを出し合いながら意見を交わすことで、課題克服のための有意義な協議にすることができた。一方で、定時制・通信制が抱えている課題の中には、現場の努力だけでは解決が困難なものも多々あり、他校と連携しながら改善に向けての具体的な方策を検討していかなければならないと感じた。特別支援学校の教頭も本研修に参加しているが、別グループであり、残念ながら意見を交わす機会がなかった。今後は、校種を越えて特別支援教育について話し合う場が必要だと思う。

A-34 高等学校新任学年主任研修講座に参加して

教諭 熊林 孝

1 研修の目的

学年経営に関する理論と実践の在り方についての研修を通して、実践的な指導力を高める。

2 期日・場所

I期 令和6年 5月28日(火) 秋田県総合教育センター

II期 令和6年 6月27日(木) 秋田県総合教育センター

3 対象

高等学校の新任学年主任、過年度の該当者で未受講者

4 内容・感想

I期

<講話> 「望まれる学年主任像と学年主任の役割」

秋田県総合教育センター スーパーアドバイザー 湯澤 寛 氏

講話の中の「思ったことを言わない。考えたことを話す。」という言葉が特に印象に残った。教師として、学年主任として「信頼」されるために、どう伝えどう行動すべきかヒントをいただいた。

<実践発表> 「学級経営の実際」

秋田県立湯沢高等学校 教育専門監 平田 恵子 氏

平田先生の経験から話していただいた内容はわかりやすくとても参考になった。特に学年主任の役割と役割を意識して実践された内容は自分がすぐに実践できる内容であり取り入れていきたいと感じた。

<講義・演習・協議> 「学年経営と組織マネジメントの基礎」

秋田県総合教育センター 主任指導主事 山田 直康 氏

秋田県総合教育センター 主任指導主事 鈴木 紀子 氏

「組織マネジメントの基礎」ということで、職場として活性化した学校の条件についてグループで考えたり、マネジメントの考え方や実践方法などを学ぶ場となりとても新鮮であり参考になった。

Ⅱ期

<講義・演習> 「生徒指導における学年主任の役割」

秋田県総合教育センター 指導主事 高橋 真理奈 氏

いじめや不登校、保護者との連携については、学年や自校でも現在進行形の重要な課題であり、学年主任としてどう課題解決に向けて関わっていけば良いか理解でき、今後の指導に活かしていきたい。

<協議> 「学年経営における課題への対応」

秋田県総合教育センター 主任指導主事 鈴木 紀子 氏

他校の実態やそれぞれの課題への取り組み、課題に対するアドバイスなど情報交換をしたことで、多くの学びを得ることができた。

<講話> 「思春期の揺れと成長を共に歩む」

秋田赤十字病院心療センター 臨床心理士 丸山 真理子 氏

丸山先生が関わってきた児童・生徒の事例を聞く中で、具体的な対処方法などをわかりやすくお話しいただきとても参考になった。講話の最後にいただいた「大事にされた記憶、親身になってもらった体験は一生その子を支えます」という言葉は心に響いた。この言葉を胸に刻み今後も生徒と向き合っていきたい。

A-40 高等学校新任道徳教育推進教師研修講座に参加して

教諭 今入 健志郎

1 研修の目的

高等学校における道徳教育について理解を深めるとともに、各校における道徳教育の実践的な推進力を身に付ける。

2 期日・場所

令和6年7月3日（水） 秋田県総合教育センター

3 対象

高等学校の新任道徳教育推進教師、令和5年度の該当者で未受講者

4 内容・感想

<実践発表> 「道徳教育推進のための取組」

秋田県立横手清陵学院高等学校 教諭 沼倉 健 氏

中高一貫校の強みを生かした道徳教育の実践について具体的な話を伺うことができた。高校では小学校・中学校のように「道徳科」の授業の設定がないが、育てたい道徳的価値を意識して教育活動を実施するという点は、取り入れられそうだと感じた。

<講義・演習> 「道徳教育の今日的な課題と推進のための取組」

秋田県総合教育センター 指導主事 八柳 英子 氏

道徳教育に求められる役割を把握することができた。人間としての在り方生き方について指導できる場面をいかにつなぎ合わせ、意味づけしていくかが重要だと感じた。

<公開講演> 「道徳教育推進上の課題と道徳教育推進教師の役割」

十文字学園女子大学 教授 浅見 哲也 氏

目指す子ども像を明確化し、それを踏まえた計画を組み立てることが必要だということが分かった。生徒に価値理解を促す働きかけについて、イメージすることができた。

<協議・発表> 「道徳教育推進に向けた課題と改善策の具体化」

秋田県総合教育センター 指導主事 八柳 英子 氏

各校の実態と取組について情報交換し、学びを得ることができた。今回学んだ道徳教育の理念を理解・共有し、その観点を踏まえ今後の教育活動を展開していきたい。

A-42 通級指導教室新担当者研修に参加して

教諭 佐々木 司

1 研修の目的

通級による指導や担当者に求められる役割等の基本的な知識を身に付けるとともに、個々の教育的ニーズを踏まえた指導・支援について理解する。

2 期日・場所

令和6年4月18日(木) 本校(オンライン実施)

3 対象

小学校、中学校、高等学校通級指導教室の新担当の教諭

4 内容・感想

<講義> 「特別支援教育の動向と通級による指導の実際」

秋田県教育庁特別支援教育課 主任指導主事 小野 武則 氏

実際のデータや法律を元に、通級指導の在り方や課題を学ぶことができた。特に高校では通級指導経験者がほぼいないこともあり、すべてが新鮮に感じられる講義であった。今後の通級指導で疑問に思うことができたなら、本講義の内容に立ち戻り法律などを確認しながら、問題などに対処していきたい。

<講義・演習> 「通級による指導における自立活動の指導」

秋田県教育庁特別支援教育課 指導主事 後松 慎太郎 氏

自立活動の内容について、基礎からわかりやすく確認することができた。所属校の通級は生徒の願いを元に進める形であるが、本講義で学習した内容を参考に生徒の立てた長期および短期の目標を元に生徒の生活上および学習上の困難を改善していきたい。

<講義・協議> 「通級指導教室の運営に当たって」

秋田県総合教育センター 主任指導主事 島津 憲司 氏

グループでの協議会が多く、中学校など様々な通級指導担当者の方と意見交換、情報交換をすることができた。講師の方のおっしゃるとおり、このつながりを大切にしてい、今後の通級指導に生かしていきたい。

令和6年度 特別支援教育に係る研修実施計画
～生徒理解の促進と指導力の向上に向けて～

特別支援教育委員会、研修部

1 目的 特別な支援が必要な生徒の個々のニーズに応じた指導を学び、生徒の可能性を引き出すことができる。また、障がいのある生徒とない生徒が共に学ぶ学習環境を整えること(インクルーシブ教育システムの構築)に関する理解を深める。

2 期 日 ①ケース相談 令和6年6月28日(金)*対象生徒Ⅱ部(S・A、A・T 等)
②研 修 会 令和6年7月29日(月)*対象生徒の相談・支援に係る研修

3 会 場 横手高等学校定時制課程(青雲館) 会議室等

4 参加者 ①ケース相談 教頭、特別支援教育コーディネーター、Ⅱ部主任 等
②研 修 会 本校教員24名

5 日 程

①ケース相談		②研修会	
16:30～	打合せ	13:30～	開会 講師紹介
16:40～	参観①通級	13:35～14:50	講話・演習
17:10～	休憩	「インクルーシブ教育システムの構築(仮)」	
17:20～17:50	参観②Ⅱ部授業	14:50～15:00	質疑応答
18:00～18:30	ケース相談	15:00～	謝辞 閉会

6 役割分担

(1)前日まで

- ・高等学校特別支援チーム(事務局 横手支援学校33-4167)と連絡調整:齊藤教頭
- *派遣依頼:高等部教頭 高橋和恵 派遣者:教諭(兼)教育専門監:菅原 咲希子
- ・事前資料等の作成(ケース相談、研修会)及び取りまとめ:佐々木司、藤谷

(2)当日

①ケース相談		②研修会	
・接待:齊藤教頭		・接待・講師紹介:齊藤教頭	
・授業参観の対応:齊藤教頭、藤谷		・会場設営:研修部	
・ケース相談進行:藤谷		・研修会進行:佐々木司	
・記録及び湯茶準備:佐々木司		・記録及び湯茶準備:藤谷	

FigJam職員研修会 実施要項

令和6年11月12日(火)

研修部・情報教育運営委員会

1 目 的 FigJamの使い方を習得し、指導力向上の一助とする。

2 日 時 令和6年12月23日(月) 11:00～11:50

3 場 所 情報教育室

4 研修内容

(1)Googleの起動、ログインの基本操作について(5分)

(2)FigJamの基本操作について(40分) 講師:石川 忍先生

(3)質疑応答(5分)

5 その他

事前調査・資料作成……………研修部・情報教育委員会

準備と復元……………研修部・情報教育委員会

進行……………研修部

記録……………研修部

令和6年度前期相互授業参観 実施要項

1 目的 相互に授業を参観し、授業改善に役立てる。

2 期間 令和6年6月26日(水)～7月17日(水)

3 参観について

(1)参観する教科は2教科(担当教科と他教科)とする。

(2)参観する際、事前に授業担当者に口頭でその旨を伝える。

4 参観のポイント

(1)ユニバーサルデザインの授業の視点(焦点化・視覚化・共有化)の10項目を5段階で評価することで、配慮されている項目と配慮が必要な項目を明確にする。

(2)授業を参観しながら配慮されている項目、配慮が必要な項目について、評価した具体的な理由や感想を箇条書きで記入する。

5 参観後

(1)「相互授業参観記録用紙」に、10項目を5段階で評価するとともに、よかった点と改善が必要な内容を入力をして印刷・保存をする。印刷後は授業担当者に提出する。

〈共有 → 2024 → 16研修部 → 相互授業参観 → R6前期
→ 授業参観記録用紙保存先

(2)「相互授業参観記録用紙」を研修部:佐々木に提出する。

提出期限:7月19日(金)

令和6年度後期相互授業参観 実施要項

1 目的 相互に授業を参観し、授業改善に役立てる。

2 期間 令和6年10月22日(火)～11月5日(火)

3 参観について

(1)参観する教科は2教科(担当教科と他教科)とする。

(2)参観する際、事前に授業担当者に口頭でその旨を伝える。

4 参観のポイント

課題を実現するための手立てが用意できているかを重点的に参観する。

課題:深い学びを実現する、対話等の言語活動の推進。

具体的な手立て

(1)対話を通じて達成すべき学習目標を理解させる。

(2)「問いかけ」や「やりとり」を通じて興味・関心を引き出すとともに、
生徒の思考を深めさせる

(3)Google ClassroomやJamboardなどを用いることで、発表を苦手とする生徒にも対話の機会を広げる。

5 参観後

(1)「相互授業参観記録用紙」に、10項目を5段階で評価するとともに、よかった点と改善が必要な内容を入力をして印刷・保存をする。印刷後は授業担当者に提出する。

共有 → 2024 → 16研修部 → 相互授業参観 → R6後期
→ 授業参観記録用紙保存先

(2)「相互授業参観記録用紙」を研修部:佐々木に提出する。

提出期限:11月11日(月)

単位制と学年制を併用する本校の教育課程～その特徴と課題～

秋田県立横手高等学校
教諭 佐々木 司

○本校生徒の実態

- ・小学校、中学校時に不登校経験のある者が多く、各クラスに長期欠席者が複数在籍している。
- ・中学校からの申し送りで、事故やいじめなど気になる記載のある者がいる。
- ・学習障害のある生徒も多く、小学校、中学校では特別支援学級や通級で指導を受けていた生徒も多数在籍する。
- ・身体に障害のある者(車椅子で生活している者、弱視の者など)も在籍している。

○本校の教育課程の特徴

- ・本校の教育課程は単位制である。運用面では学年制を併用している。
- ・アルバイト、ボランティア、インターンシップの奨励をしており、実務代替、学修Cとして単位認定を行っている。

○卒業認定の規定

- 1 在学3年以上
- 2 必履修科目の履修
- 3 修得単位数が74単位以上

○卒業認定の規定(転入生・編入生)

- 1 在学1年以上
- 2 必履修科目の履修
- 3 修得単位数が10単位以上
- 4 総修得単位74単位以上

○単位の修得

- 1 定通併修
- 2 高等学校卒業程度認定、試験合格科目の単位認定
- 3 技能審査による単位認定(漢字検定準2級→現代の国語1単位 など)
- 4 ボランティア活動、就業体験などの活動の修学
- 5 実務代替(定職・アルバイト年間90日以上)
- 6 通級による指導による単位認定

○履修体系(4修制)

- ・月曜日から金曜日までの5日間で1日当たり4時間の自部履修の修得で、LHRを除き年間19単位の修得。
- ・年間19単位の4年間修得で、74単位以上を修得し卒業する。→4修生

○履修体系(3修制)

- ・3年間で卒業する場合→3修生
- (1)19単位×3年=57単位

(2)19 単位×3年=57 単位の不足単位分 $74-57=17$ 単位を他部履修や技能審査による単位認定や定通併修などで修得し卒業

○学年制

- ・ 生徒は各年次のクラスに所属し、クラスルームの時間割に従って学習活動を行う。主に必履修科目の履修はクラスルーム固定の科目で行われる。
- ・ 各年次で 1 単位以上の修得で進級する。

○科目選択制

- 1 4月に履修説明会があり、自分の希望する科目を選択して履修することができる。
- 2 A群からD群の2単位の科目群から履修する。4単位科目は2つの群をセットで履修する。(例:文学国語など)

○他部履修

- ・ I部の生徒がII部、II部の生徒がI部の授業を履修すること

○単位制の長所

- 1 不登校傾向の生徒も単位修得がしやすい。
- 2 進級しやすい。
- 3 10月入学、9月卒業が可能。
- 4 自分のペースで学習を進めることができる。

○単位制の短所

- 1 カリキュラムが複雑。
- 2 履修科目により教科の前提知識などにばらつきがある。
- 3 生徒登校時の居場所の把握が困難。
- 4 教務的作業が煩雑。

○学年制の長所

- 1 行事などで集団的活動が可能。
- 2 担任が進路活動などの対応をしやすい。
- 3 協働的活動により社会性を育むことができる。

○学年制の短所

- 1 集団生活になじめない生徒の科目履修が困難な場合がある。
- 2 必履修科目がクラスルームでの履修が基本のため、未履修生徒や転入生・編入生の履修が困難な場合がある。

○本校の教育課程の課題

- 1 必履修科目の履修方法の改善(開設科目・開設年次・選択・クラス固定などの工夫)
- 2 集団生活になじめない生徒への対応(社会性の育成、合理的配慮などの特別支援の充実)

○まとめ

課題

- ① カリキュラムの工夫
- ② 社会性の育成
- ③ 特別支援教育の充実

令和6年度秋田高等学校定時制通信制教育研究大会

単位制と学年制を併用する 本校の教育課程 ～その特徴と課題～

秋田県立横手高等学校定時制課程
教諭 佐々木 司

学校の沿革

平成14年

単位制・2学期制の導入

平成18年

秋田県立横手高等学校に移管、
独立校舎となる。

学校の沿革

昭和23年

秋田県立横手工業高等学校定
時制課程開設

昭和40年

統合により秋田県立横手東高
等学校と名称変更

学校の沿革

平成20年

新校舎竣工

二部制の導入

I部 13:00～／II部 17:20～

1校時～8校時（45分授業）



学校の沿革

平成6年

秋田県立横手工業高等学校に
移管、普通科定時制課程開設
平成7年

3年修業制の導入

教育方針

教育基本法及び学校教育
法の趣旨に則り、「**知・
徳・体**」の調和のとれた
人格の完成を目指すと共に、

教育方針

「**剛健質朴**」の校風のもと、「**青雲の志**」を抱き、「**天佑自助**」の精神で、

＜実践指針＞

すべての教育活動において生徒の人格の完成と進路目標の達成を含めた自己実現を促し、変化が速く先行きの不透明な時代に柔軟に適応し、社会に貢献していける人間の育成を図る。

教育方針

国内外を含む将来社会の幸福と発展に貢献する有為な人材を育成する。

＜具体的な手立て＞

1. 規律ある生活

健康的な生活リズムを身に付けさせるとともに、端正な整容や明るいあいさつ、場面に応じた言葉遣いなど、社会において求められる行動を習慣化させる。

教育目標

「一人ひとりの成長の支援と社会性の育成」

～深い理解と見守る温かい目、社会につなげる丁寧な指導～

＜具体的な手立て＞

2. 知的好奇心を刺激し、生徒が成長の手応えを感じられる授業

生徒が様々なことに興味を持ち、疑問を持ったことは自分で考える習慣を身に付けさせるために、授業においても生徒の興味を引き付ける題材を提示し、主体的・対話的な学習を行って思考を深めさせる。適切なフィードバックによって生徒に自分の力が伸びていることを実感させる。

<具体的な手立て>

3. 生徒会活動・部活動の活性化

生徒会行事を主体的に運営したり、部活動・ボランティア活動に取り組むなど、多くの方々と協働する活動を奨励し、自己肯定感や自己有用感を育てる。

進路状況(令和6年11月現在)

	卒業生数	就職	進学	未就職を含むその他
令和元年度	28	16	9	3
令和2年度	26	12	11	3
令和3年度	25	12	9	4
令和4年度	20	9	11	0
令和5年度	26	7	15	4 (職業訓練1)
令和6年度(予定)	44	26(希望)	14(希望)	4 (職業訓練3)

<具体的な手立て>

4. キャリア教育の推進

外部人材の講話やインターンシップ、アルバイト等を通じて、社会の一員としての自覚を植え付け、自己の将来について考えさせるとともに、コミュニケーション能力や自他の理解能力を高める。

在籍生徒数(令和6年11月現在)

	令和6年度	令和5年度	令和4年度	令和3年度
I部	127	128	125	109
II部	15	10	8	3
合計	142	138	133	112

<具体的な手立て>

5. 人間尊重の精神及び公共の精神の涵養

学校生活のあらゆる場面を通して、生命や人権の大切さを教え、多様な価値観を認める寛容さと、社会の一員として求められる公共の精神を育成する。

生徒の実態

- ・不登校経験のある者
- ・中学校からの申し渡しで気になる記載のある者(事故・いじめなど)
- ・学習障害のある者
- ・身体に障害のある者

生徒の実態

- ・精神が不安定で通院、カウンセリングを受けている者
 - ・保護者や家庭環境に問題があると思われる者
 - ・生活習慣が著しく悪い者
- 年度当初に2回の情報交換会

卒業認定の規定 (転入生・編入生)

- 1 在学1年以上
- 2 必履修科目の履修
- 3 修得単位数が10単位以上
- 4 総修得単位74単位以上

本校の教育課程の特徴

- 1 単位制であるが、運用面では学年制を併用
- 2 アルバイト、ボランティア、インターンシップを奨励、実務代替、学修Cとしての単位認定

修業の年限について

- 1 3年以上、原則8年以内
- 2 転入生・編入生は前籍校を含め8年以内

卒業認定の規定

- 1 在学3年以上
- 2 必履修科目の履修
- 3 修得単位数が74単位以上

単位の修得

- 1 定通併修
- 2 高等学校卒業程度認定試験合格科目の単位認定
- 3 技能審査による単位認定
(漢字検定準2級
→現代の国語 1単位 など)

単位の修得

- 4 ボランティア活動、就業体験などの活動の修学
- 5 実務代替（定職・アルバイト年間90日以上）
- 6 通級による指導による単位認定

履修体系（三修制）

3年間で卒業する場合→**3修制**
 (1) 19単位×3年=57単位

履修体系

1 月曜日から金曜日までの5日間で4時間の自部履修の修得で、LHRを除く
年間 $5 \times 4 - 1 = 19$ 単位の修得

履修体系（三修制）

(2) 19単位×3年=57
 単位の不足単位分
 $74 - 57 = 17$ 単位
 を他部履修や技能審査による単位認定や定通併修などで修得し卒業

履修体系

2 年間19単位の4年間修得で、74単位以上を修得し卒業する
 → **4修制**

本校の教育課程の特徴

学年	科目	履修単位数											
		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
1	基礎科目	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
2	基礎科目	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
3	基礎科目	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
4	基礎科目	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
5	基礎科目	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
6	基礎科目	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
7	基礎科目	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
8	基礎科目	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
9	基礎科目	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
10	基礎科目	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
11	基礎科目	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
12	基礎科目	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
13	基礎科目	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
14	基礎科目	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
15	基礎科目	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
16	基礎科目	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
17	基礎科目	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
18	基礎科目	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
19	基礎科目	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
20	基礎科目	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
21	基礎科目	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
22	基礎科目	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
23	基礎科目	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
24	基礎科目	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
25	基礎科目	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
26	基礎科目	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
27	基礎科目	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
28	基礎科目	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
29	基礎科目	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
30	基礎科目	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
31	基礎科目	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
32	基礎科目	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
33	基礎科目	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
34	基礎科目	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
35	基礎科目	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
36	基礎科目	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
37	基礎科目	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
38	基礎科目	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
39	基礎科目	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
40	基礎科目	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
41	基礎科目	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
42	基礎科目	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
43	基礎科目	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
44	基礎科目	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
45	基礎科目	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
46	基礎科目	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
47	基礎科目	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
48	基礎科目	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
49	基礎科目	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
50	基礎科目	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
51	基礎科目	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
52	基礎科目	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
53	基礎科目	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
54	基礎科目	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
55	基礎科目	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
56	基礎科目	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
57	基礎科目	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
58	基礎科目	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
59	基礎科目	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
60	基礎科目	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
61	基礎科目	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
62	基礎科目	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
63	基礎科目	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
64	基礎科目	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
65	基礎科目	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
66	基礎科目	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
67	基礎科目	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
68	基礎科目	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
69	基礎科目	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
70	基礎科目	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
71	基礎科目	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
72	基礎科目	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
73	基礎科目	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
74	基礎科目	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
75	基礎科目	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
76	基礎科目	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
77	基礎科目	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
78	基礎科目	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
79	基礎科目	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
80	基礎科目	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
81	基礎科目	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
82	基礎科目	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
83	基礎科目	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
84	基礎科目	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
85	基礎科目	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
86	基礎科目	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
87	基礎科目	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
88	基礎科目	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
89	基礎科目	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
90	基礎科目	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
91	基礎科目	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
92	基礎科目	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
93	基礎科目	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
94	基礎科目	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
95	基礎科目	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
96	基礎科目	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
97	基礎科目	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
98	基礎科目	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
99	基礎科目	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
100	基礎科目	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1

学年制

1. 生徒は各年次のクラスに所属し、クラスルームの時間割に従って学習活動を行う。主に必修科目の履修はクラスルーム固定の科目で行われる。
2. 各年次で1単位以上の修得で進級する。

実際の時間割（I部・3年次）

	月	火	水	木	金
1	論国	地総	体育	体育	論国
2	体育	地基	論国	論国	総探
3	地総	選B	選D	選C	選A
4	LHR	選C	選A	選B	選D
5		選B	選D	選C	選A
6		選C	選A	選B	選D

← I部の時間帯
クラス固定
選択履修
II部の時間帯
選択履修

科目選択制

1. 4月に履修説明会があり、自分の希望する科目を選択して履修することができる。
2. A群からD群の2単位の科目群から履修する。4単位科目は2つの群をセットで履修する。（例：文学国語など）

実際の時間割（II部・3年次）

	月	火	水	木	金
3		選B	選D	選C	選A
4		選C	選A	選B	選D
5	地総	選B	選D	選C	選A
6	地基	選C	選A	選B	選D
7	論国	地総	論国	論国	論国
8	LHR	体育	体育	地基	総探

← I部の時間帯
選択履修
II部の時間帯
クラス固定

他部履修

1. I部の生徒がII部、II部の生徒がI部の授業を履修すること
2. 上記の選択科目の他にクラス固定の科目を他部履修することも可能

単位制の長所

1. 不登校傾向の生徒も単位修得がしやすい。
2. 進級しやすい。
3. 10月入学、9月卒業が可能。
4. 自分のペースで学習を進めることができる。

単位制の短所

1. カリキュラムが複雑。
2. 履修科目により教科の前提知識などにばらつきがある。
3. 生徒登校時の居場所の把握が困難。
4. 教務的作業が煩雑。

学年制の短所

3. II部は2～4年次の担任が共通で1つのグループにされることが多いため、学年への所属意識が希薄である。

学年制の長所

1. 行事などで集团的活動が可能。
2. 担任が進路活動などの対応しやすい。
3. 協働的活動により社会性を育むことができる。

本校の教育課程の課題

1. 必履修科目の履修方法の改善
(開設科目・開設年次・選択・クラス固定などの工夫)
2. 集団生活になじめない生徒の対応。
(社会性の養成、合理的配慮などの特別支援の充実)

学年制の短所

1. 集団生活になじめない生徒の科目履修が困難な場合がある。
2. 必履修科目がクラスルームでの履修が基本のため、未履修生徒や転入生・編入生の履修が困難な場合がある。

まとめ

長期的な課題

- ①カリキュラムの工夫
- ②社会性の育成
- ③特別支援教育の充実

編集後記

今年度の研究紀要は特別支援教育専門監を外部講師として迎えた校外と連携した研修や、校内の研修記録を掲載している。職員研修は特別支援教育を中心に行った。ケース会議では対象2名の生徒に対し、現状分析や今後の対策の検討を行い理解を深めた。職員研修会ではインクルーシブ教育システムの構築をテーマに、ユニバーサルデザインや合理的配慮を含めた個に応じた指導の充実へ向けての職員の理解を深めた。

授業研修では ICT を活用した深い学びを実現する対話活動を意識した授業改善に取り組んだ。具体的には生徒が FigJam を活用することで、多くの生徒の意見を取り上げることができる授業になることを目標とした。

青雲館には多種多様な生徒が集まってきている。人数は少ないがそれらの生徒一人ひとりが安心して生活し、成長できる場を目指して職員一同取り組んでいる。本冊子はその取り組みの一部を紹介させて頂いた。

ご感想をいただければ幸いである。

なお、表紙は今年度の学校祭(「星河祭」)で展示した、モザイクアートの写真である。モザイクアートは学校祭恒例の展示作品であり、全校生徒がそれぞれの思いを込めながら、1cm 角のピースを1枚1枚のり付けし、完成させたものである。

(佐々木司 記)

令和6年度 研究紀要

秋田県立横手高等学校 定時制課程

〒013-0037 秋田県横手市前郷二番町 10 番1号

令和7年3月 発行

電話 0182-32-2011 FAX 0182-32-0133
URL <http://WWW.yokote-h-tei.akita-pref.ed.jp/>
E-Mail yoko-tei@akita-pref.ed.jp